

北海道の屯田兵

屯田兵として知られる農民兵士たちは、明治時代における和人（民族的日本人）の北海道開拓において重要な役割を果たしました。ロシア帝国との紛争や緊張関係により、明治政府は 19 世紀後半に日本の北方領土を確保する必要に迫られました。屯田兵制度は 1874 年に始まり、これらの農民兵の役割は日本の北方国境を守ることであり、北海道の発展を促進することでした。

屯田兵の大多数は、1870 年代初めに政府が実施した社会改革によって生計手段を失った武士でした。最初、このプログラムは元武士だけに開放されていました。政府から住居や土地の供与、税金免除、その他の優遇措置が提供されていました。旭川では、各屯田兵の世帯に約 5 ヘクタール（12 エーカー）の耕作地が与えられました。

その代わりに、屯田兵は現役と予備役を合わせて 20 年間の兵役を契約しました。兵士たちは軍事演習を行い、整地や道路建設を手伝いました。暖かい季節には彼らは家族とともに農業にも従事しました。

1890 年から、適格性の制限が解除され、プログラムはあらゆる背景を持つ応募者に開放さ

れました。旭川に移住した人々の大多数は農民でした。彼らは豆類、小麦、ジャガイモなど、寒冷地に適した作物を栽培しました。旭川に定住してすぐ、彼らは一般的に暑く湿度の高い地域で育つ作物である米の栽培を試みました。水田開発と試験的生産の 10 年後、稲作は最終的に定着しました。1874 年からこのプログラムが終了した 1904 年の間に、約 4 万人の入植者が屯田兵として北海道にやって来ました。